日本の言語学

第一巻　言語の本質と機能

川本茂雄　日下部文夫　柴田武　服部四郎　編

大修館書店

編者略歴

川本茂雄（かわもとしげお）

1913年東京生まれ。1937年早稲田大学文学部文学科卒業。現在早稲田大学教授。

日下部文夫（くさかべふみお）

1917年愛知県生まれ。1940年東京大学文学部言語学科卒業。現在新潟大学教授。

柴田　武（しばたたけし）

1918年愛知県生まれ。1942年東京大学文学部言語学科卒業。文学博士。現在埼玉大学教授。

服部四郎（はっとりしろう）

1908年三重県生まれ。1931年東京大学文学部言語学科卒業。文学博士。東京大学各誉教授，日本学士院会員。

Linguistics in Japan vol. 1,
The Nature and Function of Language
© Editors, Shigeo Kawamoto
Fumio Kusakabe
Takeshi Shibata
Shirô Hattori
Taishukan Publishing Company, 1980

日本の言語学 第1巻 言語の本質と機能

1980年8月1日　初版発行　　定価 5,400円

編者　川本茂雄
日下部文夫
柴田　武
服部四郎
検印省略
発行者　鈴木敏夫

発行所　株式会社 大修館書店
［101］東京都千代田区神田錦町 3-24
電話(03)294-2221(大代表) 振替東京 9-40504

印刷／壮光舎　製本／牧製本　装幀／NDC 山崎登
＊ 3380-110010-4305

はしがき

『日本の言語学』第一巻は、この論文集成の初巻として、当然のことながら、後続の諸冊に対して総説の役割を果すべきものとして企画された。事実、第二巻の「音韻」、第三、第四巻の「文法」、第五巻の「意味・語彙」は言語の内部構造を扱い、第六巻「方言」、第七巻「言語史」は言語の空間的変異と時間的変遷を主題とするのに対して（第八巻は「総索引」）、第一巻はそれらを総括し、その根底となるべき諸問題を採上げるべく構想され、はじめは「言語理論」の巻名のもとに構想が進められ、幾多の項目が列挙され、それらの項目のもとに、日本人の手になる独創的、モニュメンタルな論文を捜し求め、これを討議に付した。事の実際に当っては日下部文夫氏の援助を得て川本茂雄が担当の衝に当ったが、『日本の言語学』の編集責任者、服部四郎、柴田武両氏が終始参画された。

こうして、各回長時間にわたった会議が十四回重ねられたのであるが、他の巻においては長い学問的伝統によって構成の枠組についてほぼ拠るべきものが存在しているのに反し、第一巻に関してはそのようなものが見当らず、したがって検討のために集められた諸論文について、それらの採否を決定しつつ、同時に巻の構成自体を幾度か修正してゆく必要に直面した。

まず、会議の初回から「言語理論」という表題は必ずしも適切ではなく、これを「言語の本質と機能」と改めることが提案され、採択された。このことによって、いっそう広大な視野にわたって論文を収容することが可能になった。

次に、予備的に列挙した諸項目について、採択に値すべき論考が見当らない場合があることが明らかになった。例え

ば、日本語においては豊富であると考えられる音象徴について、事実を十分に集収した上で体系的に整理した、すぐれた論作が、期待に反して見出されなかったごときである。このことは、失語症や言語習得についても同じであった。国語の特性についても、世に話題とされることが頻々であるにもかかわらず、これこそはという論考に遂に巡り合わなかった。

こうして、採録すべき論文が決定してゆくにしたがい、一巻の構成が次第に型をなして浮かび上ってきた。まず、前半は、「言語の本質」という項に纏め得べき論文である。それは、言語以前というべき動物のコミュニケーションの考察に始り、この領域では我が国には卓越したニホンザルの調査研究があるので、それによって動物のコミュニケーションと対比して人間言語の独自性を明らかにする緒口とした。ついで、本体というべき社会的習慣の体系として言語を考察した論考を「言語本質論」として収め、これに続いて、そうした言語をいかに研究すべきかを眼目とする「言語研究法」の項目を設けた。

後半には、ゆるやかな意味で「言語の機能」の標題で総括し得るような論文を集めた。まず、言語が実際に行使される「場」との関連において敬語の問題を採上げた。敬語表現の特に豊かな日本語を母国語とするわれわれにとっては、最後の項目である「文字・表記」とともに重要かつ好箇の研究題目であることは改めて言うまでもない。その他に、言語と社会について、文章・文体について、注目すべき意義深い研究に遭遇したので、それらを採録した。

本巻の作製については、大修館の藤田佐一郎、石川一行の両氏の協力に負うところが大きい。特に、石川氏には詰めの段階でいろいろと御苦労をかけた。ここに謝意を表する。

昭和五十五年六月十五日

川本茂雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

はしがき……川本茂雄……iii
凡例……x

〈コミュニケーション〉

ニホンザルのコミュニケーション……伊谷純一郎（『自然』昭和二十七年六巻一〇號）……五
コミュニケーションの進化……伊谷純一郎（『理想』昭和四十六年四五六号）……一七
表現行動のモデル……林四郎（『国語学』昭和四十八年九二集）……三三

〈言語本質論〉

言語における社會慣習……神保格（『言語研究』昭和二十九年二六・二七號）……五五
言語音声は何を伝えるか……上村幸雄（『言語生活』昭和三十九年一五一号）……七二

言語觀念の成立……神保　格（『言語學概論』大正十一年）……八五
心的過程としての言語本質觀……時枝誠記（『文學』昭和十二年　五卷六、七號）……二一〇
言語過程説について……服部四郎（『国語国文』昭和三十二年　二六卷一号）……一六三

〈言語研究法〉

メンタリズムかメカニズムか……服部四郎（『言語研究』昭和二十六年　一九・二〇号）……一八五
言語生活の二十四時間調査……柴田　武（『言語生活』昭和二十六年　一号）……二一三
日本の記述言語学……服部四郎（『国語学』昭和四十―四十一年　六二、六四集）……三三五

〈言語の場・敬語〉

話の場……三尾　砂（『國語法文章論』昭和二十三年）……二九五
待遇……松下大三郎（『日本俗語文典』明治三十四年）……三〇一
敬語法の研究、總論……山田孝雄（『敬語法の研究』大正十三年）……三三五
場面と敬辭法との機能的關係について……時枝誠記（『國語と國文學』一五卷六號　昭和十三年）……三三一
敬語の心理……三上　章（『現代語法新説』昭和三十年）……三四一

〈言語と社会〉

こどもの言葉は移住によってどう変るか……北村　甫（『言語生活』昭和二十七年　八号）……三五七
アイヌ語における年長者層特殊語……服部四郎（『民族学研究』昭和三十二年　二一巻三号）……三六九

〈文章・文体〉

和歌と俳句……波多野完治（『文章心理學の問題』昭和十六年）……三八九
新聞記事――文章心理學的研究――……波多野完治（新聞協會資料一一號　昭和二十三年）……三九九
文章と性格――谷崎潤一郎氏と志賀直哉氏――……波多野完治（『文章心理學』昭和十年）……四五五
詩形論……土居光知（『文學序説』昭和二年）……四九六
「文章の性格学」への基礎的研究――因子分析法による現代作家の分類――……安本美典（『国語国文』昭和三十四年　二八巻六号）……五〇九
音韻交替と意義分化の関係について――所謂清濁音の対立を中心として――……鈴木孝夫（『言語研究』昭和三十七年　四二号）……五三九

〈文字・表記〉

日本の文字について――文字の表意性と表音性――……橋本進吉（『國語と國文學』二四巻一號 昭和二十二年）……五五三
表記体系の分析……樺島忠夫（私家版 昭和四十一年）……五六一
句讀點の心理學……波多野完治（『文章心理學の問題』 昭和十六年）……六〇一

解　説

『言語の本質と機能』の巻の構成について……川本茂雄……六二七
コミュニケーション……柴田　武……六三一
言語本質論……日下部文夫……六三四
言語研究法……柴田　武……六四二
言語の場・敬語……日下部文夫……六四六
言語と社会……服部四郎……六五二
文章・文体……川本茂雄……六五五
文字・表記……服部四郎……六六一

参考文献……六六九
索　引……六七五

言語の本質と機能

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

コミュニケーション

ニホンザルのコミュニケーション

伊谷純一郎

『自然』六巻一〇號
（中央公論社昭和二十七年）

カットはニホンザルの攻撃的な表情，（グア）という音聲を發するときの表情である。（成獸♂）

まえがき

ニホンザルの自然社會の形態とその機能が、次第に明らかになってゆくにしたがって、彼等のもつ多くの音聲が、その群れ生活にとって重要な役割を果たしていることがわかってきた。

われわれが觀察してきたニホンザルの群れは、主として山地の急斜面の森林に棲んでいる。群れはそのテリトリーの中を、一團となって移動する。採食のときの平面的なひろが

りは、移動のときには線的なひろがりとなり、彼等にとって特に危険な谷や道を横断するときは、一列縦隊になってわたるのである。彼等の生活様式は、このように、採食地から採食地へと秩序ある〝遊牧〟がくりかえされる一種の遊牧生活である。

しかし、それだけでは、なお、群れの成立を説明したことにはならない。たとえば、個々のサルが、おもいおもいの場所で、それぞれに好きな食物をとりつつ、ばらばらになって遊牧していてもよいのではないか。あるいは、ばらばらになっても成立するはずの生活を、どうしてばらばらにしないで、彼等はいつも一つの群れとして行動しているのであるか。あるいはこの問題を、もうすこしちがった形にして提出するとすれば、群れをつくる個體がばらばらにならずにいるということには、なにかそこに、彼等をばらばらにしないような機能が、彼等のあいだに具わっているのでなければならないであろう。そして、われわれは、彼等のあいだに認められるコミュニケーション(communication)こそは、まさにこうした機能の一つの有力な現われに他ならないと考える。われわれは、こういう立場からニホンザルの鳴き聲を研究しようとするものである。

われわれは、野外において、まず多くの鳴き聲を聞きわけることからはじめなければならなかった。つぎに、群れの、または個體の、どのような狀態(situation)のときに、どのような音聲が發せられるか、またある音聲に對應するところのサルの行動は、いかなるものであるか。それからさらに、一つの音聲と他の音聲との間には、どのような關係があるか、といったことが、問題であった。ゆえに、これから述べようとするのは――ニホンザルの音聲が、はたして言語といいうるものか否かという議論は、ひとまずおあずけにすることにしても――いわば、ニホンザルの言語社會學的な考察である。

音聲の種類と音聲相互間の關係

現在までに、われわれは、20餘種の音聲を分類してきた。これは音質からして、4つの類型に屬する。同じ類型内の音聲は、音質・アクセント・つよさ・連繫・間隔などによって區別される。將來これを、もっと細かく、30～40種に分類するとも、錄音その他のより科學的な方法を採用するとすれば、不可能ではないであろう。けれども、鳴き聲を發音記號によって表現することは、ほとんど不可能にちかい。從って、ここでは、キャッチした各音聲を、不滿足ではあっても、一應片假名によって表現するよう努力してみた。

さて、音聲の4つの類型と、その中の代表的なものについて簡單に說明しよう。

第1類のものは、（ウー）（クー）といった單調な、やわらかい聲、及びそれに種々なアクセントの加わったものである。いずれも一音ずつ發せられ、つぎの音聲との間隔は比較的長い。われわれが、この類型に入れたものは最も多く、十種餘にのぼっている。一番單純な（クー）（ウー）の音聲に、いろいろなアクセントが加わると、（クー）と長く、（クイー）と尻上りに、また（ホウイー）と丸く、あるいは（クオ）と短く詰った形になる。またこの（クー）（ウー）は子音的な働きをなし、そのあとに他の類型の音聲がちょうど母音的に結合して、他の類型の音聲との中間的な型のものをつくる。たとえば（ウワー）（ウギー）（クュン）などがこれである。（クー）（ウー）という音聲は、他の類型のものがどちらかといえば差し迫った心理的狀態の表出であるものに反して、平靜な安定感と、おだやかさをもっている。これはニホンザルの鳴き聲の基本的なもののようにおもわれる。この類型の音聲は、おもに群れの統合に役立ち、個體間の呼びかわし、前進の合圖などに用いられることが多い。この類型のものを、"A型"と名づけることにする。

第2類のものは、（キャー）（ギャー）という張り裂けるような激しい音聲が、その基調をなしている。人間の悲鳴、幼兒の泣き聲と、非常に酷似している。長く連繫され、次第に激しさを增すことがある。主として、中以下の個體によって發せられる。よりドミナントな個體に威嚇されたり、外敵に遭遇したりしたときに、よく聞くものである。しかし、時として、遊びの最中に、この音聲のおこることもある。（アギー）という警聲、（ホイ・ジー・ジー・ジー）とい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com